

意外なくらいすぐに覚える

石井教育研究所では、数年前から、全くかな文字のない漢文を幼児に教えて来ました。一クラスが六名内外の編成ですから、手軽にどんな指導でも試みられます。それでも、試みる前には、果たして受入れてくれるものかどうか、危ぶまれたものです。

しかし、やってみますと予想以上に幼児はこれに取り組み、意外なくらいよく覚え、読ませてみますと、よどみなく読みます。そんな話を、本会・理事長の井上文克先生(大阪・小路幼稚園園長)に話したら、「早速それをうちの幼稚園で実践してみたい」と言って、論語のテキストを作らされることになりました。幼稚園の先生方は、論語だと見たこともないと思いましたが、幼児にわかりやすいものを選んで、これを講義できるような形に編集してやりました。

その後、「うまく行っている」という話を井上先生から聞き、大阪へ出張した折、小路幼稚園を訪問して、その実際指導を見せてもらいました。ところが、研究所の少数クラスと違って、大勢で朗読する様は何とも壮観で、迫力を感じるほどのものがありました。

それで、その様子を八ミリ映画に写してもらい、その年、東北大学で開催された“大学漢文教育研究会”の全国大会で、全国各地から

参集された大学教授たちに見せ、大いに驚嘆させたものです。

その後、井上先生と話し合い、唐詩選・五言絶句(最短詩)の中から、幼児にわかりやすいものを約50句ほど選び、幼稚園児用教科書として編集し、これを漢字教育実践園に普及して行こう、ということになりました。

ところが、私が園長をしている青桐幼稚園の子供たちには、一寸気遅れがして実践しかねていましたが、先生たちの意気込みに力を得て、まず年長児に試みました。すると、どの子もすらすらと読み、字を覚え、大丈夫だとわかりました。今では年少児も、年長児に負けずにやっています。

かねて私は、湯川秀樹博士が満三歳を迎えた正月から、論語などの漢文の学習を始めたという事実について、「博士の才能が特別に優れていたから、三歳で漢文が読めたのだ」という一般の考え方は誤りで、「三歳から漢文を学習したので秀才になったのだ」と推察していました。

それで、幼稚園児が、どの子も、論語や唐詩などの漢文を平気で学習し、覚えるという現実を受けて、いよいよその感を強くしています。

夏目漱石や森鷗外の全集を見ますと、その学識の広さ深さに全く圧倒されてしまいます。とても人間業とは思えないほどです。しかし、それは幼児期を無為に過した私たちだからであって、幼児期から漢文を学習していたら、漱石や鷗外のように、英文やドイツ語が読めて書けるようになるのだと思います。

脳の発達は生後三年間が最高

わが国の脳生理学を打ち立てられた故・時実利彦先生は「脳の発達は生後の三年間が最も目覚しく、ついでその後の六年間が著しい」とおっしゃっています。この最もよく発達する時期に頭を使えば、頭の働きは最も良くなるわけです。漱石・鷗外・湯川博士が偉大になれたわけです。

ところで、幼児期に余りよく出来るようになると、学校に入ってから学習がやさしすぎて、これをばかにするのではないかと、言って、幼児期の学習を疑う人がよくいます。これは幼児を大人の頭で見る、全く誤った考えだと思います。

大人は生かじりの知識で満足しがちですが、幼児にはそんな者はいません。幼児は、出来れば出来るほど熱心に反復練習して止みま

せん。文字を書く学習では、最もよく出来る子が最も熱心です。出来ない子ほど意欲に乏しく早く飽きてしまいます。

それだから、「予習」ということに意義があるのではありませんか。すでに知っているということが学習意欲を強めるものであって、もしもそれが学習意欲を弱める恐れがあるとしたら、予習が尊ばれるわけがないでしょう。

数学者・広中平祐氏が文化勲章を受けられた次の日、テレビでアナウンサーが、「先生は子供の頃から数学が大層よく出来たと伺っておりますが、学校の数学がやさし過ぎてつまらなかったのでは？」と言いかけるや、即座に「とんでもない。数学の時間が最も楽しく、最も意欲的だった」と答えていらっしゃいました。

「得意だから一生懸命にやる」というのが人間の本性であって、「不得意だから頑張る」ということは、望ましいことではあるが、なかなか出来ることではありません。

だから、私は、学校に進んで意欲的な学習の出来る子供にするために、幼児期から十分に学習させ、よく出来る、自信を持った子供にしてやりたいと思うものです。